海外体験 ノウハウ生かす

ガレキの街から ルポ

NGOが救援活動

避難所の被災者を巡回して診察するAMDAの医療チーム＝神戸市長田区で

阪神大震災の現場に、全国からかつてない規模の多数のボランティアが集まっている。その中に、難民やスラム住民の支援など海外を舞台に活動を続けてきた顔見知りのNGO（非政府組織）のメンバーもまじる。これまで国内での活動とは縁の薄かった彼らをつき動かしたものは何か。国や行政に先んじて海外体験とノウハウを活用しながら復興を目指す被災者救援に立ち上がる姿に、「ボランティア精神」の原点があった。

（社会部・藤原 健）

行政の遅れをカバー

ボランティア精神の原点

家屋倒壊に火災が追い打ちをかけ、最大級の被害を出した神戸市長田区。その区役所の五階の保健所に医師と看護婦が泊まり込み、近くの避難所を巡回訪問看護する。夜は、急患にそなえる。

アジア十四カ国に支部を持つAMDA（アジア医師連絡協議会、事務局・岡山市）のメンバーがここに活動拠点を置いたのは、地震発生の一月十七日。アフリカ・ルワンダの難民医療から帰国したばかりの医師二人を含むメンバー六人が「ともかく現場へ！」と、岡山から同日深夜に現地入り。被災者に薬を配り、けがをして運ばれてくる住民の診療に当たった。順次送り込まれた医師、看護婦、ボランティアは既に延べ八百人近い。

地震発生一カ月を前にした今月四日、それまでの診療業務を地元の医師や保健所に引き継ぎ、訪問看護に切り替えた。以後は巡回訪問看護と長期的なメンタルヘルスケアが活動の柱になるが、震災直後は、近くの西市民病院が半壊するなどで地元の医師らの動きがとれず、その間、AMDAが緊急医療を支えたことになる。

AMDAは一九八四年の設立以後、アジア・アフリカの難民救援をはじめ、フィリピンの火山、バングラデシュの大洪水など自然災害で被害を受けた現場にもメンバーや、それぞれの知り合いの医師を投入した。日本国内での活動歴はなかったが、代表の曽波茂医師（四）は「国内で発生した空前の被害。しかも、震災直後は行政に動きがとれず、空白が生まれた。その空白を埋めるためにこれまでの経験を救援に生かさなければ、と思った」と話した。

同市兵庫区の寺院に拠点を置いたのは、カンボジア難民救援やタイ・バンコクのスラム街クロントイなどでの救援活動を十五年間続けるSVA（曹洞宗国際ボランティア会、本部・東京都）。ボランティアや曹洞宗総本山で修行中の雲水ら約三十人が補助給食（炊き出し）、援助物資の運搬などに走り回る。

地震発生直後から寺院に陣取ってボランティアの活動を調整した八木沢克昌・事務局長代行（三）は、クロントイに約八年間滞在したことがある。「神戸の被災地を走る自転車、バイク、給水車…。アジアのスラム街を思わせる環境にほうり込まれた人々に、何とか力を貸したい」

タイ、カンボジア国境の難民キャンプやカンボジア国内で幼児の保育に当たってきたCYR（幼い難民を考える会、本部・東京都）は一月末、手製の遊具を携えた高田美江子さん（四〇）らが長田区に入った。カンボジア難民救援を直接のきっかけとして八〇年、タイ・バンコクで発足したJVC（日本国際ボランティアセンター、本部・東京都）も、関西のメンバーが神戸市に多い外国人向けの相談窓口を開設した。

地元神戸市のNGOが結成した「阪神大震災地元NGO救援連絡会議」（事務局・同市中央区、毎日新聞神戸支局ビル内）は七日午後、第一回連絡会議を開催。こうしたボランティア団体の連絡調整に当たる。

その責任者の一人、中田豊一・事務局長代行（三）も八六年から三年間、バングラデシュ・ダッカで農村の生活改善運動に取り組んだ。神戸が復興しないと、研修生の受け入れなど海外向けの活動もできない。その意味で今、神戸のために活動することは海外救援活動と密接に結びついている。「海外経験のあるボランティアは、日本政府の対応の遅さを肌に染みて実感している。それを補うためにも、我々がこれまでのノウハウを駆使して、復興の日まで動くしかない」と、自発的に公益のために働き、被災民の自立を促すボランティア精神の意義を強調した。

電話で各地の被災状況を調べる「阪神大震災地元NGO救援連絡会議」のメンバー ＝神戸市中央区で